



「主催者挨拶文」

平成29年 8月 27日（日）

文化交流プラザ・スワニー 大ホール

本日は、梅雨を思わせる長雨も去り、ようやく暖かな陽射しが感じられる秋の気配の中、当「尾駮の牧」歴史研究会主催「六ヶ所村歴史フォーラム2017」へ、村内外から、多数、足をお運び頂き、誠に有難うございます。

また、開催に辺りまして、六ヶ所村まちづくり協議会並びに、六ヶ所村文化振興公社様、更には各関係機関の多大なるご尽力に、この場をお借りいたしまして、主催者を代表して、厚く御礼を申し上げます。

さて、当「尾駮の牧」歴史研究会主催「歴史フォーラム」も、本年で六年目の開催となり、皆様のお手許にある「開催実施要項」に記載ありますように、シリーズ化したテーマ“「尾駮の駒・牧」の背景を探る”も、いよいよ、シリーズ〈最終回〉となりました。

これまで、古の昔・平安時代、当地が、馬の交易によって、京の都とつながっていたのではないかという仮説を検証するべく、文献学、考古学、更には、平安時代の人と物との精神文化に、より精通するべく、文学的研究成果も取り入れて、その主題にアプローチしてまいりました。

今フォーラムは、文献学から、“奥州藤原氏”研究の第一人者、更には“平泉文化遺産”「世界遺産」登録の立役者でもあります、東北大学名誉教授の入間田宣夫先生をお迎えして、また、考古学からは、地元・青森県考古学会副会長の瀬川滋氏、更には、三沢市教育委員会の長尾正義氏をお迎えして、「古代・小川原湖と“尾駮の牧”一人・物・情報の交流について」のテーマのもと、より一層、具体的且つ詳細に、「尾駮の駒・牧」の歴史的背景に、迫って見るものであります。

どうか、ご来場の皆様方には、今年も、ロマン溢れる「尾駮の駒・牧」の歴史に思いを馳せて頂ければと存じます。

また本年も、開催テーマにふさわしく、オープニング・エンディングアクトにおきましては、「雅楽・みちのく楽舎」による、日本の古典伝統音楽「雅楽」の、“舞楽演奏”と“管絃演奏”、更には“謡物”などをお楽しみ頂きます。

どうか、ご来場の皆様方には、時間の許す限り、最後までお付き合い下さいますようお願い申し上げ、簡単ではございますが、私の挨拶とさせていただきます。

本日は、ご来場頂きまして、誠に有難うございます。

六ヶ所村「尾駮の牧」歴史研究会 会長 相内知昭



「来賓祝辞」

来賓代表

六ヶ所村長 戸田 衛 様

皆様、おはようございます。フォーラム開催にあたり、一言、お祝いを含めご挨拶を申し上げます。日ごと涼しさが増し、収穫の秋の足音が感じられる今日のよき日に、関係各位のご協力と多くの皆様方のご臨席のもと、「六ヶ所村歴史フォーラム2017」が盛大に開催されますことに、心からお喜びを申し上げます

本日のフォーラムは、六ヶ所村「尾駈の牧」歴史研究会主催により2012年から毎年開催されており、本村の古の歴史を紐解く研究として、大変意義深い取り組みであると考えております。

また、研究会では、次代を担う子どもたちに対しましても、村内小中学校への「出前講座」として、六ヶ所村の歴史の伝承や古典音楽・雅楽鑑賞会を開催していただいているとのことであり、相内会長はじめ会員の皆様には深く敬意を表する次第であります。

ご承知のように、本村には原子燃料サイクル施設等エネルギー関連施設や先端科学の研究施設が多く立地し、エネルギーの村・科学の村として、国内外から注目されておりますが、一方で、遥かに時を遡った平安の時代、尾駈の駒を介した中央との経済・文化の交流を想像するときに、この六ヶ所村に潜在する大きなロマンを感じるところであります。

本日は、「尾駈の駒・牧の背景を探る」シリーズの最終回として、このあと、諸先生方による基調報告、並びに基調講演をいただくと伺っておりますが、先生方におかれましてはご多忙にも拘わらずご来村賜り、心から感謝申し上げます。

また本日は、みちのく楽舎による舞楽演奏や管絃演奏が披露されるとのことで、当フォーラムに一層の厳粛さと華やかさを添えるものをご期待しております。

「尾駈の牧」歴史研究会の皆様には、今後も研究に邁進され、平安時代における六ヶ所村の歴史に夢を与えていただくとともに、更に活動の輪が広がっていくことを切に願うところであります。

結びに、当フォーラムのご盛会と皆様方のより一層のご活躍、ご健勝を心からお祈り申し上げ、お祝いの言葉といたします。

「六ヶ所村歴史フォーラム 2017」開催模様 (No.1)

平成 29 年 8 月 27 日(日) 午前 10 : 30 ~ 午後 15 : 40 迄
六ヶ所村文化交流プラザ・スワニー 大ホール



フォーラム開催の受付の様子



開会行事の様子 (司会の高澤さん、主催者挨拶-相内会長、来賓挨拶-戸田村長)

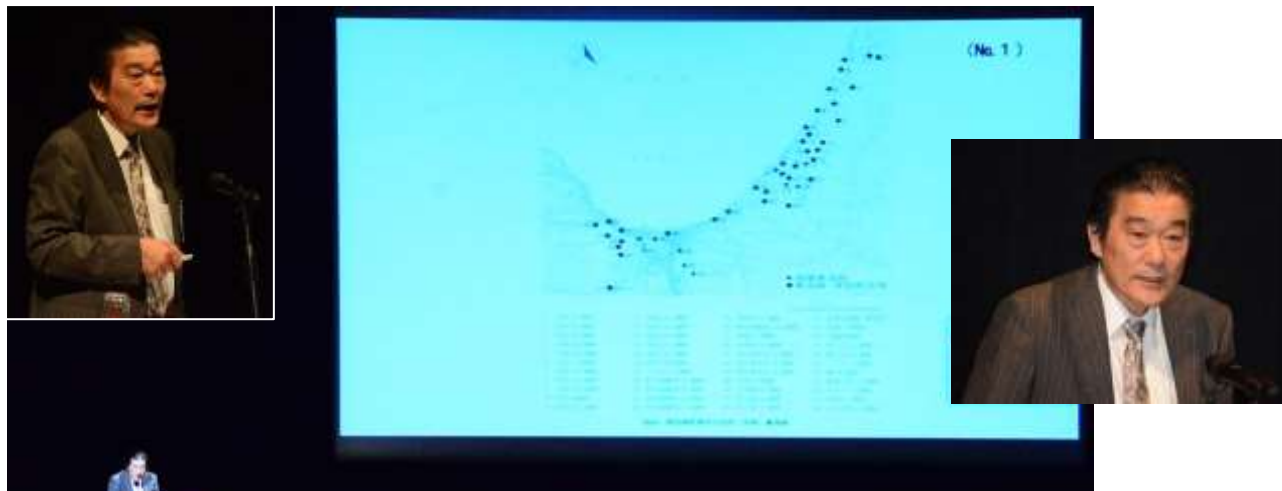


オープニングアクトの様子 (左方の舞「萬歳楽」)



「六ヶ所村歴史フォーラム 2017」 開催模様 (No.2)

瀬川 滋 先生の基調報告①の様子



入間田 宣夫 先生の基調講演の様子



長尾 正義 先生の基調報告②の様子

「六ヶ所村歴史フォーラム 2017」 開催模様 (No.3)

「二十平(1)遺跡」遺物



「表館(1)遺跡」遺物



「平畑(1)遺跡」遺物



パネルディスカッションの様子



「六ヶ所村歴史フォーラム 2017」 開催模様 (No.4)



管絃演奏「黄鐘調音取」「越殿楽」



謡物「越殿楽今様」



講師先生方との記念写真

ーシリーズー〈最終回〉 「尾駈の駒・牧の背景を探る」
六ヶ所村歴史フォーラム 2017
 「古代・小川原湖と”尾駈の牧” ー人・物・情報の交流について考えるー」



〈講師プロフィール〉

◇入間田 宣夫 (いるまだ・のぶお) 略歴



- 1942年 宮城県涌谷町生まれ。
1964年 東北大学文学部国史学専攻史学科卒業。
1968年 東北大学大学院文学研究科国史学専攻博士課程中退。
1968年 東北大学文学部助手。
1972年 山形大学教養部講師。
1981年 東北大学教養部助教授。
1993年 東北大学文学部・国際文化研究科教授。
1996年 東北大学東北アジア研究センター・国際文化研究科教授。
2005年 東北大学を定年退職、客員教授（宮城学習センター）
2006年 東北芸術工科大学芸術学部歴史遺産学科教授。
2004年～2006年 「平泉の文化遺産」世界遺産登録推薦書作成委員会委員。
NHK大河ドラマ『炎立つ』の監修を務めた。
2013年4月～ 現在、一関博物館館長。
※最近は、平泉藤原氏の政治・経済・文化を研究している。

〔著書〕

- 『百姓申状と起請文の世界 中世民衆の自立と連帯』（東京大学出版会 1986年）
『日本の歴史 7 武者の世に』（集英社 1991年）
『中世武士団の自己認識』（三弥井書店 1998年）
『都市平泉の遺産』（山川出版社 日本史リブレット 2003年）
『北日本中世社会史論』（吉川弘文館 2005年）
『平泉藤原氏と南奥武士団の成立』（歴史春秋出版 歴春ふくしま文庫 2007年）
『平泉の政治と仏教』（高志書院、2013年）
『藤原清衡 平泉に浄土を創った男の世界戦略』（ホーム社 2014年）
『藤原秀衡 義経を大將軍として国務せしむべし』（ミネルヴァ書房・日本評伝選、2016年）

〔共編著〕

- 『よみがえる中世7 みちのくの都多賀城・松島』（大石直正共編 平凡社 1992年 10月）
『葛西氏の研究』（名著出版 1998年〔関東武士研究叢書〕）
『北の内海世界 北奥羽・蝦夷ヶ島と地域諸集団』
(小林真人、斉藤利男共編 山川出版社 1999年 7月)
『平泉の世界』（本澤慎輔共編 高志書院 2002年〔奥羽史研究叢書〕）
『日本の中世5 北の平泉、南の琉球』（豊見山和行共著 中央公論新社 2002年）
『城と石垣 その保存と活用』（峰岸純夫共編 高志書院 2003年 4月）
『東北中世史の研究』（高志書院 2005年 6月）
『十和田湖が語る古代北奥の謎』（義江彰夫、斉藤利男共編著 校倉書房 2006年 7月）
『平泉・衣川と京・福原』（高志書院 2007年 7月）
『中世武家系図の史料論』（峰岸純夫、白根靖大共編 高志書院 2007年 10月）
『牧の考古学』（谷口一夫共編 高志書院 2008年 2月）

◇瀬川 滋 (せがわ・しげる) 略歴



- 1953年 青森県野辺地町生まれ。
- 1967年 青森県考古学会員。
- 1999年 日本考古学協会員。
- 2016年 青森県考古学会 副会長就任。

[主な発掘調査・報告書執筆]

- 「馬門槻ノ木遺跡」報告書 (1980年)
- 「柴崎(1) 遺跡」報告書 (1996年)
- 「向田(24)遺跡」, 「有戸鳥井平(4) 遺跡」, 「有戸鳥井平(5) 遺跡」報告書 (2001年)
- 「明前(4) 遺跡」, 「明前(5) 遺跡」, 「野辺地蟹田(11) 遺跡」報告書 (2011年)
- 「二十平(1) 遺跡」報告書 (2007年)
- 「向田(36)遺跡」報告書 (2011年)
- 『野辺地町史』「考古部門」執筆
- 〈六ヶ所村発掘調査報告書〉
 - 「睦栄(4), (6) 遺跡」報告書 (1993年)
 - 「泊(1) 遺跡」報告書 (2004年)
 - 「家の後(3)～(6)」, 「千樽(2) 遺跡」報告書 (2006年)

◇長尾 正義 (ながお・まさよし) 略歴



- 1956年 青森県三沢市生まれ。
- 1986年 青森県考古学会員。
- 1988年～1993年 三沢市歴史民俗資料館 勤務。
(三沢市自治振興公社職員)
- 1993年 日本考古学協会員。
- 1993年～2016年 三沢市教育委員会 生涯学習課文化振興係。文化財全般担当。主担当は、埋蔵文化財行政。
 - ※この間、ほぼ毎年、1遺跡ないし2遺跡の発掘調査を実施。多い時で、3遺跡の発掘調査を実施。
- 2016年3月 定年退職。
- 2016年4月～2018年3月 三沢市教育委員会 生涯学習課文化振興係 専任員。
 - 現在、三沢市米軍基地内の発掘調査を実施中。(2016年～2017年)

※『青森県史』編纂考古部会調査研究員。

◇ オープニングアクト

舞楽

左方の舞『萬歳楽(まんざいらく)』



平舞(文舞ともいう。緩やかにやわらかく舞うもの)中で、最も演奏される機会の多い代表的な舞である。

隋の煬帝、用明天皇(6世紀)等の作といわれる。唐の賢王の世には鳳凰が飛来し、「賢王万歳」とさえずる。その詞を楽に作り、姿を舞にしたという。慶賀に際して、答舞(続いて演奏される右舞)の『延喜楽(えんぎらく)』と共に演奏されることが多い。変化にとんだ曲調によく沿った舞の姿である。

◇「左舞」・・・アジア大陸の楽舞のうち、唐楽と林邑楽を中心として構成されている。赤色系統の装束(しょうぞく)を着け、音楽の旋律(せんりつ)にあわせて舞い、舞人は鑑賞者から見て、左側の楽屋から出入りする。音楽は、鞆鼓・太鼓・鉦鼓・笙・箏・篳篥・龍笛によって演奏される。



【延喜楽(えんぎらく)】

「朗詠(ろうえい)」・・・『越殿楽今様(えてんらくいまよう)』

◇ エンディングアクト



『和漢朗詠集』

- ・「朗詠」・・・平安時代初期に、催馬楽(さいばら)とほぼ同時に発生し、漢詩に曲を付けたもの。通常、雅楽に含まれる。前半を「一の句」、後半を「二の句」と呼び、一の句は低音から発声するのに対し、二の句は高音から発生する。
- ・「越殿楽今様」・・・『越天楽』のメロディーに歌詞を付けた『越天楽今様』である。雅楽の楽器を伴奏に使う場合のみ、雅楽の謡物に該当する(楽部のレパートリーには入らないが、民間の雅楽団体のレパートリーには入る場合が多い)。特に有名なのは「春のやよいの」で始まる慈鎮和尚の歌詞。この曲に舞を付けたものは「今様舞」と呼ばれ、白拍子装束で舞う。この他にも様々な歌詞が付けられた。これが九州に伝わったものが筑前今様となり、後に黒田節と呼ばれるようになった。

雅楽



黄鐘(おうしき)調『音取(ねとり)』『越殿楽』

漢の武帝が作るという、また張良という人が作ったともいわれる。我が国への伝来は不詳。大神惟季の頃までには、「平調(ひょうちょう)」のみだったが、法勝時金泥一切供養の日の錫杖衆の下楽に、「盤渉調(ばんしきちょう)」へ渡される。後に、「黄鐘調」へ渡される。

古くより親しまれ、「今様」や「黒田節」などに編曲される。